

一八八六年四月十八日(日)

コシポールでナレンドラたちと共に

「恥じらいが女にとつての飾り——以前、校長の家を訪ねたこと

翌朝、タクールはモニをお呼びになった。彼はガンガーで沐浴をしてからタクールにお会いしたあと、屋上へ上がっていたのだ。

モニの妻は、息子を亡くした悲しみに打ちひしがれていた。タクールは、彼女をここに連れてきて、何かブラサード(お下がり)を食べさせるようにとモニにおっしゃる。

タクールは仕草で——「ここに来るようにお言い。二日くらい泊まって——赤ん坊も連れてきて、ここでブラサードを食べなさい」

モニ「はあ、有り難うございます。(妻が)神を信仰するようになりましたら、どんなにいいかと思うのでございます」

聖ラーマクリシユナは又、手まねでおっしゃる——「ウンフーン——あまりの悲しみが、信仰を押しつけてしまった。あんなに大きくなっていたんだからね！」

クリシュナキシヨルにバヴァナートくらしいの息子が二人あつて、ある程度まで教育を受けていたが、それが二人とも死んでしまった。あれほどの智者がねえ！ はじめのころは我慢ができなかった。わたしは幸運だったよ——神さまが子供を授けてくれなくて！

アルジュナだつて大変な智者だ——いつもクリシュナといっしょにいて。それでも息子のアビマニユが死んだとき、すっかりまいってしまった！ それはそうと、どうしてキシヨリーは来ないんだらう？」

一人の信者「あの人は、毎日ガンジス河に行つて沐浴するのでございます」

聖ラーマクリシュナ「でも、どうして此処に來ないんだらうね？」

信者「来るようにと申しましょう」

聖ラーマクリシュナ「(ラトゥに)——ハリシュはどうして來ないんだね？」

「<sup>ク</sup>恥じらい<sup>ク</sup>が女にとつての飾り——以前、校長の家を訪ねたこと」

校長の家の九つか十になる二人の女の子がコシポールの別荘にきて、タクールに歌をうたつておきかせした。<sup>ド</sup>ドゥルガーの名を常にとなえよ<sup>ク</sup>わが心 黒蜂のごとく魅せられたり<sup>ク</sup>などである。タクールがシャームプクルのテリパラにある校長の家を訪問なさつたときも(一八八四年十月三十日、木曜日、カルティク月十五日、白分十一日且)この二人の女の子が歌をおきかせした。タクールは歌を聴いて大そうお喜びになつた。今日、二階のタクールの部屋でこの二人が歌っている間、信者たちは階下におり

て聴いていた。あとで階下に呼んできて、また聴いた。

聖ラーマクリシュナ「校長に向かつて——お前の娘たちに、あれ以上歌を教えちゃいけないよ。子供が自分ひとりで歌っているのならともかく、人前で歌うようになると、恥じらいがなくなって平気になってしまう。女の子には恥じらう気持ちがとても必要なんだよ」

〔タクール、ご自分を拝む——信者にブラサード(花)を下さる〕

タクールの前にある花かごに花と白檀が入れてある。タクールはベッドの上に坐っていらつしやる。そして、その花と白檀をそなえてご自分を拝んでおられる。花をご自分の頭の上にのせたり、喉にのせたり、胸やおへその上にのせたりしていらつしやる。

マノモハンがコンナガルから来て、タクールにごあいさつしてから傍に坐った。タクールはまだ、ご自分を拝んでいらつしやる。お首に花輪をおかけになった。

やがて満足したご様子で、マノモハンにお供えの花を下さった。

校長にも香り高い黄色いチャンパ(キンコウボク)の花を下さった。

**ブッダは神の存在を認めただか？ ナレンドラへの教え**

九時になった。タクールは校長と話していらつしやる。部屋にはシャシーもいる。

聖ラーマクリシュナ「(校長に)——ナレンドラとシャシーはどんなこと話していたかね——何を議

論していたんだい？」

校長「(シヤシーに)——君たち、どんな話をしていたんですか？」

シヤシー「ニランジャンが言ったんですか？」

聖ラーマクリシユナ「神は存在するかしないか、こういうような話が出たんだろ？」

シヤシー「(にっこり笑って)——ナレンドラを呼んできましようか？」

聖ラーマクリシユナ「呼んどいで——」

ナレンドラが入ってきて坐った。

聖ラーマクリシユナ「(校長に)——お前、何か聞いてごらん。(ナレンに)これ、何を話していたか聞かせておくれ」

ナレンドラ「どうも消化不良(理解不足)のまま——何もお話しすることはありませんよ」

聖ラーマクリシユナ「すぐに治るさ」

校長「(笑いながら)——ブツダの境地はいかがですか？」

ナレンドラ「まあ、それを話せたとしても、どれだけ分かっていることやら？」

校長「神の存在について、ブツダは何と言っておられるのですか？」

ナレンドラ「なぜ、神が存在するとおっしゃるのですか？ 世界を創造するのは、ほかならぬあなた自身なんですよ！ Barkley(バークリー)が何と言っているか、ご存知の筈でしょう！」

校長「ええ。彼はたしかに『Their esse is percipi(存在とは知覚されることなり)』と言っています。

——「The existence of external objects depends upon their perception. (感覺器官が作用している間だけ世界は存在する!）」

〔以前の話し——トーター・プリーがタクールに助言したこと——世界は心の内にあり〕

聖ラーマクリシユナ「ナンゲタ(トーター・プリー)がよく言っていたよ。世界があるのも消えるのも心次第だ。つて。

でもね、私<sup>の</sup>の感じがある間は、あの御方と私<sup>の</sup>との関係を、主人と召使いにしておく方がいいんだよ」

ナレンドラ「(校長に)——よくよく考えてみたならば、神が存在するなんてどうして言えますか？しかし、その存在を信じているとすれば、主人と召使いの関係を認めなくてはならないでしょう。それを認めたら——まあ、どうしても認めざるを得ないでしょうが——神は慈悲深いということも言います。

あなたは、とかく不幸なことばかりに目を向けていらつしやるが——どれほどの幸いを与えて下さったかを忘れてはいらつしやいませんか？ 何たる神の恩恵！ 三つの実にすばらしいものを我々にお与え下さった——人間に生まれたこと。神を求める熱意。それから、かくも偉大な靈的指導者との交流。人と生まれ、解脱を求め、大師に導かる！」

みな、沈黙していた。

聖ラーマクリシユナ「(ナレンドラに) わたしは、実にハッキリと感じるんだよ——わたしの中に、誰かがいることをね」

ラジェンドラ・ラール・タッタ先生が入ってきて坐った。ホメオパシー療法でタクールを治療している医者である。葉の話が終わると、タクールは指の合図でモノモハンのことをお指しになった。

ラジェンドラ先生「彼は、私には母方の従兄(いとこ)の息子にあたります」

ナレンドラは階下に降りて行つた。一人で歌を口ずさんでいる。

君に会いて、わが悲しみはすべて去り

その美しさに、わが命は溶けたり

君ゆえに、七つ世の苦惱(くるしみ)は消え

ましてや、つたなき我などは——

(訳註) バークリー——ジョージ・バークリー (1685～1753) アイルランドの哲学者・聖職者。Esse est percipi (ラテン語)『存在とは知覚されることなり』という基本原則を提唱した。例えば机を叩くと硬さを感じるが、夢の中で机を叩いても硬さを感じることができない。それは、机そのものを認識したのではなく、知覚として認識しているからであると説明した。そして、この世界はわたしが知覚する限りにおいて「わたしの心の中に存在する」のであって、存在とは知覚によって得られる観念であり、観念の原因は神であるとし、知覚する精神と神のみを存在と認めた。

ナレンドラはまだ、十分にこなしきっていないようだった。彼は校長にこう言った——「愛と信仰の道にいれば肉体に心が戻ってくる。それがなければ、僕はいったい何ものでしょう？ 人間でもなく——神々でもなく——喜びもないし、悲しみもない」

〔タクルの自拝——スレンドラにブラサードを下さる——スレンドラの奉仕〕

夜の九時。スレンドラはじめ数人の信者たちがタクルに花輪を持ってきて献上した。部屋にはブラーム、スレンドラ、ラトゥ、校長たちがいる。

タクルはスレンドラの持参した花輪をご自分の首におかけになった。信者たちはみな黙って坐っている。タクルはご自分のなかにいらっしゃる御方をお祀りして、礼拝しておられるように見える！突然、スレンドラに合図をしてお呼びになった。スレンドラがベッドのそばに行くと、ご自分の首におかけになった花輪を外して、お手づから彼の首にかけて下さった！

スレンドラは花輪をおうけて礼拝した。タクルはまた合図で、足をさすってくれるようにと彼におっしゃる。スレンドラはしばらくの間、タクルの足をおさすりしていた。

〔コシボールの庭で信者たちのキールタン合唱〕

タクルのいらっしゃるお部屋から見ると、西の方角に池が一つある。その池の石段のところ、数人の信者が長太鼓とシンバルに合せて歌をうたっている。タクルはラトゥに、そこへ行つてこ

う言うようにとお命じになった——「お前たち、すこしハリ称名をおし」

校長やバブラームは依然としてタクルの傍に坐っていた。そして、みんなが歌っている。

「神カミの名称えて わたしのガウルは踊るよ」

タクルは歌をきいていらっしやるうちに、校長とバブラームたちに合図をなされた——「お前たち、下へ行け。あれたちといっしょに歌え。そして、踊るといい」

二人は階下へ降りてキールタンの合唱に加わった。

しばらくすると、またタクルのお使いがきた。「次の句を入れろ」とのお言いつけである。

「ガウルは踊りも知っている！」

「ガウルの気持ちは口では言えぬ！」

「わたしのガウルはもろて双手あげて踊ってる！」

キールタンは終わった。スレンドラは法悦にさめやらぬ風情でまだ歌っている——

わたしのバグロババ気狂い父さん（シヴァ）

わたしのバグリマ気狂い母さん（カーリー）

わたしはふたり両親のバグロ気狂い息子チュレ

母さんの名はシャーマ

父さん、ポポホンとほつぺた叩き



1886年4月18日(日)

母さん、酔っ払ってフラフラと

父さんの体にぶっ倒れ

黒髪さんばら振り乱し

真紅の蓮のふたつの足に

数えきれない蜂が飛ぶ

足輪のリンリン鳴るその音を

そう、そう、お聞き、さあ、お聞き